
セカンドライフは異世界で【改訂版】

もりこ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンドライフは異世界で【改訂版】

【Zコード】

Z3922S

【作者名】

もりー。

【あらすじ】

主人公を夢見た凡庸な少年は非日常へと脚を踏み入れた。

誰よりも才能に溢れた少年は非日常へと脚を踏み入れた。

確かな愛を胸に秘めた少女は非日常へと脚を踏み入れた。

『近所さん達の冒険譚、開幕。

この作品は「セカンドライフは異世界で」の設定を元に新たに書き起こした作品です。前作とは異なる設定が出る可能性が多くありますので御了承下さい。

プロローグ（前書き）

お待たせしました。改定前と比べて序盤はシリアル多めですので御了承下さい！

プロローグ

人は誰でも夢を見る。

ああなりたいと。 『うありたいと。 こんな筈ではなかつたと。 いつか』いづなる筈だと。

夢には2種類ある。

叶える事の出来る夢（田標）と叶う事が決してない夢（絵空事）。

夢（田標）を持つものはそれを叶える為に尽力すれば良い。
ない。

夢（絵空事）を抱いてしまつた者は 一体どうすれば良いのだらうか？

昼休みの始まる矢張りチャイムが鳴った。

「さて、帰りひつ」

私は鞄に荷物を詰め込み、帰り支度を素早く済ませる ちなみに
今日は6限まで授業があるのでけれど、
私にはそんな事情は関係無い。

「…また早退するの？」

後ろの席から掛けられた声に振り返ると、クラス委員で同じ部活の高堂朱里が恐る恐る、と言つた風に首を傾げていた。

「ああ、毎度毎度悪いけれど、担任には脾臓が死ぬ程痛いから帰つたと言つておいてくれ」

じゃあ、と言つて私は席を立ち、教室を出た。高堂以外のクラスの連中はそんな私を冷ややかな眼で見ていた。まあ、だからと言つて何なんだと言つた話なんだけれど。

「何でなの……？」

教室から今にも泣き出しそうな呟きが聞こえた様な気もしたけれど、私は振り返らずに学校を後にした。

学校を早退した私は繁華街の外れにある、廃ビルの屋上に居た。

落下防止用のフェンスは朽ち果てていて、容易にフェンスの向かい側に行く事が出来る。

「此処から飛び降りたら……」

まあ、十中八九死ぬだろ？。別に私は自殺志願者ではない。ただ、此処から飛び降り、死の危険に触れる事によつて私に秘められていた力が覚醒すれば良い、と思つてゐるだけである。

「無い。絶対に、無い」

100回生まれ変わつて100回飛び降りたつて結末は変わらない。此処から40メートル下で凄惨な死体が出来上がるだけだ。

私に秘められた力があれば良い、だなんて夢はただの絵空事でしかない。現実逃避とも言える。

それでも…それでも私はそんな絵空事を捨てきれず、相も変わらずこんな所で落ちこぼれているのだ。

「……家に、帰ろ」

春先とはいえ、流石に外は冷える。そう思つて落下防止用のフェンスの内側に戻つた直後だった。

「あん？」

ブレザーをだらしなく着た煙草臭い連中がぞろぞろと入ってきた。人数は4…いや、5人か。

恐らく此処は不良達の溜まり場だつたのだろう。不良達は揃いも揃つて好戦的な表情を浮かべていた。

無言で不良達の間をすり抜けようとしたが、やはり阻まれた。

「お前、何してんの？」

不良達のリーダー格らしき男が問い合わせてきたので、私は何とかこの場を上手く切り抜ける為に言葉を発しようとしたが、それよりも速く、薄汚いスニーカーの爪先が私の鳩尾に突き刺さつた。

「あ、が…つー?」

「問答無用だつづーの、ボケが」

堪らず膝を着いた私の髪を乱暴に掴んで持ち上げたリーダー格は煙草によつて黄ばんでしまつた歯を剥き出しにして笑つた。

「取り敢えず出すもん出して…そつからほお楽しみのサンドバックタイムだぜ?」

リーダー格の言葉に、周りの不良達が下品な笑い声を上げた 肩
め。

其処からは地獄の様な時間だった。

何回殴られただろうか。何回蹴られただろうか。もう何もかもが曖昧だった。

「あー…飽きちまつたし、そろそろ帰つか?」

「んだな」

「取り敢えず、こいつの財布で昼飯でも行こーぜ?」

「そりゃいいなあ!」

漸く解放されたと思い、私は地面に横たわりつつも視線だけを不良達の背中に向ける。さつと帰れ。

「 何とか間に合つたみたいだな

不良達の誰とも違つ声が耳に届いた。

「ああん？ 何だてめ 」

リーダー格が何か言い掛けた瞬間、リーダー格の身体が思いつきり吹き飛んだ そして私の身体にぶつかり、私は潰れたカエルの様な声を上げてしまった。

「ああ、悪いな！ 見えてなかつたわ」

まるで悪びれた様子の無い声に、苛立ちを込めて視線を向ける。その先には自信に満ち溢れた瞳が爛々と輝いていた 何だ、こいつは。

男の身長は一七〇センチとすこし位で、見覚えのあるブレザーアジだった。確かあの制服は県下でも有数の名門校のものだつた筈だ。おまけに超が付くほどのイケメンだつた… きっとリア充に違いない。死ねば良いのに。

「悪いけど、依頼があつたんでお前ら全員ぶつ飛ばすわ」

おまけにこのイケメンは喧嘩もすこじぶる強く、瞬く間に残りの不良達を片付けていく。

「まるで物語の主人公、だな…」

何故だろつか、助けてもらつている筈なのに返つて気分が悪い。

「てめーかあ！ 「イツ呼んだのはあーー？」

私のすぐ横で倒れていたリーダー格が唾を飛ばしながら叫び、私の胸ぐらを掴んで持ち上げ、落下防止用のフェンスに叩き付けた。

私は目の前の男よりも背中越しに伝わるフェンスが千切れる感触で気が気では無かつた。

「いらっしゃ、何やつてんだお前は」

「あが！？」

リーダー格の男の頭頂部に踵が叩き付けられ、リーダー格は力無く崩れ落ち　此方に倒れ込んできた。

そして遂に、強度の限界を迎えたフェンスが外側に向けて倒れた。リーダー格は辛うじてビルの縁に引っ掛けかって事なきを得ていたが、私はあっさりと身体を宙に投げ出していた　ああ、死んだか。

「　掴まれつ！」

イケメンが叫びながら手を此方に差し出してきた。恐らく、この手を掴めば私は助かるのだろう。

頭が良くて格好良くて、喧嘩が強くて人助けも出来てしまう。こいつは正真正銘の主人公だ。

だからだろうか、私は反射的にその手を弾いていた。

「つー？　お前、何やつて　」

「お前になんか、助けて欲しくは無い」

そして私は数秒後、40メートル下の路上で凄惨な死体を曝す羽目になった。

プロローグ（後書き）

御意見御感想などなどお待ちしております！

1 「転生の器」

とある冒險者、アイラが前世の記憶、と言つものを自覚したきつか
けはほんの些細なものだった。

「おい、大丈夫か？」

頭上から掛けられた声に反応する事が出来ない。それほどにアイラ
は混乱している。

「ちょっとお兄ちゃん！　どうせ紛れて変な事しようとしてた
でしょ！？」

「いや、してねぶへつ！？　おまつ、いきなりグーで殴るか普通！
？」

地面にへたりこんでいたアイラがちらりと視線を向けると、殴り合
いと言うか一方的な暴力だが　をしていた男女が揃つて此方
へと窺うような視線を返してきた。そう、この二人は

「ティムレイト、アリシア…か」

男の方はティムレイト＝ハーリア。そしひ女の方はティムレイトの
妹のアリシア＝ハーリア。アイラはこの二人と旅をしていたのだ

『アイラの記憶』によると、だが。

廃ビルから落下し、地面に叩き付けられた瞬間に意識が飛んだ薫は

気が付くと雲の上に居た。そして目の前には白い装束を身に纏つた壯年の男性が豪奢な椅子に腰掛け、此方を見下ろしていた。

「やはり、私は死んでしまったのか」

恐らく此処は天国で彼は神様なのだろうと薫は推測し、力無く呟いた。

「つむ、理解しているのならば早速本題に移らせてもいい」

神は薰の返答を待たず、指をぱちん、と鳴らした。すると次の瞬間、何もなかつた筈の空間にモニターが現れた。しかも、そのモニターは空中にふかふかと浮かんでいた。

「これは…」

モニターには様々な項目、そしてその右には『+4』や『-1』と言つた数字がずらりと並んでいた。

「これはお前が生まれてから死ぬまでの間に行つてきた善行や悪行をリストアップし、その内容を点数化したものだ」

「それで、その点数に何か意味が?」

「来世での処遇が決まる。いや、決める事が出来る、と言つた方が正しいか」

神の説明を聞いた薫はその内容を頭の中で考え、そして問い合わせた。

「つまり、前世の持ち点によっては来世の融通が効く…と言つ事で

良いのか?」

「100点の回答だな」

びつやから正解ひじい。

「それで、私の持ち点は何点ある?」

大して期待はしていないが、特に犯罪行為などに手を染めたことも無かつたのである程度の点数はあるだろうと思っていた薫は次の瞬間、文字通り固まつた。

「2点」

「は?」

「2点だ」

「2点、2点でお前、おかしいやろ」

思わず素になつてしまい地元の方言で突っ込んでしまう薫を尻目に、神はもう一度指を鳴らした。するとモニターの表示が切り替わつた。

「これが持ち点を消費する事によつて選択できる項目だが」「

「いやちよつと待て。いくら何でも持ち点が少なすぎるだろ?。明らかに作為を感じるのだが」

説明を遮られた神は特に気分を害した様子もなく、薫の疑問に答えるべく話し始めた。

「本来ならばお前の持ち点は1002点あつた。ちなみにこれだけあれば来世ではどの分野においても才覚を發揮出来ただろう……しかし、だ。お前」

自殺しただろう? と神は首を傾げた。

「ち、がう……あれば、事故だ」

「いや、お前は助かる筈の命を自ら捨てた。それは許されぬ行為だ」

「違う! 私は、死にたくなんてなかつた!」

薰は首を振り乱しながら叫んだ。

「では、何故あの時、救いの手を払い除けた?」

「それ、は……それは……」

言い淀む薰。神は何も言わず、ただ薰の言葉の続きを待っていた。

「……そう。私は、主人公になりたかったんだ」

「そんなものは創作物の中にしか居ない」

「それでも! それでも……私は特別な何かが欲しかつた。それがあれば私はあんな寂しい思いも、惨めな思いも、辛い思いもせずに済んだのに……そして、私は誰かにとつての主人公になれた筈なのに……」

支離滅裂だとは分かつていながらも、薰は血の思ひを吐き出した。

「ふむ、なにがいつよつか」

神が再び指をならすと、モニターの表示内容が最初に表示されたいた内容に切り替わる。モニターの最下部、先程まで2点と表示されていた総合点の項目には100000000000点と表示されていた。

「は…？」

薰は呆然としつつも、モニターに並ぶ〇の数を数えてみる。

「1000億点……極端すぎるだね！」

「ただし、10の点数で得た項目が効力を發揮するには条件がある」

「条件、とは」

薰が先を促す。

「条件とは、お前が来世で今の記憶を取り戻す事だ」

「どうやって？」

「とある行動を起せば自動的に記憶が戻る様に細工してある……まあ、日常生活ではまずしない動きだが」

「それは無理な気がするんだが」

「主人公になるのだろ？　これくらいの難題、越えてみろ」

「……分かったよ」

薫が観念した風に呟くと、神は満足気に頷いた。

「つむ、では付加する能力の選択をしてもらおうか」

「……いやしかし、キーとなる動作が明らかにおかしいだろ？」

宿屋のベッドの上でアイラは頭を抱えながら呟いた。記憶を呼び戻す動作がまさか『くしゃみをしながらバナナの皮で足を滑らせて尻餅を着く』だとは誰も思わないだろ？　と言づか、最早それは動作ではなく事故だとアイラは神に突っ込みたかった。

「おい、お前本当にどうしたんだよ。大丈夫かマジで」

「ああ、うん。もう大丈夫だ」

ベッドの傍らから気遣わしげな声を掛けてくるティムレイイトに愛想笑いを返しつつ、アイラは部屋の中を見回す。現代では考えられないような古めかしさだと思う一方、これがこの世界では当然のクオリティだとも思づ。前世の自分（^{アイラ}薫）と現世の自分の意識が混ざり合つて、頭がずきずきと痛む。

そんなアイラの様子を見たティムレイイトが少し呆れた様な表情を浮かべ、半ば無理矢理にアイラをベッドに押し倒し、布団を被せた。

「わふ…つー

「良じから、今日はもつ寝てゐ。今日の分の依頼は俺とアリシアでやつとくから

そしてアイラの返答を待たず、ティムレイトは部屋から出て行った。アリシアはすでにギルドに出向いていたので、部屋には布団を引っ掛けられて畳を白黒させているアイラだけが残つた。

「ティムめ…私よりも身長が低いくせに生意氣な奴

身長は低いものの、何だかんだで面倒見が良くて頼りが甲斐もある男、と言つのがアイラの中にあるティムレイトの記憶だ。ちなみにティム、と言つのは仲間内での彼の愛称だつたりする。

「わー、これからどうよづか…」

ベッドの上で上半身だけを起こし、アイラは考える。前世と現世の記憶の齟齬はリアルタイムで收まりつつあるが、すでに『アイラ』が構成していた現在の人間関係をどうするかが問題である。現世の記憶は確かに自分自身のものなので今まで通り生きていく事も可能ではあるが、前世の記憶が確かならば、記憶を取り戻した自分は莫大な持ち点によつてかなり強化されている筈だ。現在の様に、3人でつるんで掛け出し冒険者の様な真似をしなくとも好き勝手に生きていいく事が可能だろう。

アイラを取るか、薫を取るか、悩み所である。

「まあ、取り敢えず現状を理解する為にも外に出るか

つまる所、現実逃避である。

そう決めると、アイラは早々に部屋から飛び出し、宿を出た。それから少し歩いて町の表通りに出ると、其処は中々の賑わいを見せていた。通りのあちこちには露天商が様々な商品を並べて声を張り上げ、鎧やローブを身に纏った冒険者らしき集団は串に刺さつた何かの肉を頬張りながら談笑し、小さな子供達が甲高い声を上げながら走り回っている。前世では過疎化の進みつつある住宅街に住んでいたアイラにとつては何もかもが眩しく映つた。

「おう、アイラじゃねえか。今日はあの兄妹とは一緒にじゃねえのかい？」

あちこちを見ながらふらふらと歩いていると、皮製の鎧に身を包み、背中には身の丈程もある槌を背負つたやたらと厳つい男が声を掛けてきた。確か彼は

「ボルドーか。そつちこそ今日は一人なのか？」

『アイラ』の記憶を頼りに、なるべく平静を保つて声を掛ける。『薰』はこういったタイプの手合いが居ると黙つて道を引き返す程度には小心者だったのと、現在も出来るだけ話を長引かせたりせず、早急にこの場を立ち去りたいと考えていた。

「おう、最近は依頼が立て込んでたからな。たまには休まねえと身体が駄目になっちまうつて連中にじやされてよ……つたぐ、俺はまだまだ余裕なんだからよ、元気が有り余つて仕方ねえぜ」

「まあ、元気だけが取り柄みたいな奴だからな、お前は」

つい『アイラ』の調子で軽口を叩いてしまい、頭の中で「何言つて
んの私!?」と叫んでいたアイラだったが、ボルドーの方は特に気
を悪くした様子も無く、豪快に笑うだけだった。

「じゃあ、私はちょっと用があるから。またな」

話を切り上げ、足早にその場を立ち去りつとしたアイラだったが、
ボルドーに腕を掴まれた。

「まあ待てよ、実はお前の耳に入れておきたい事が」

「触んな!」

生来の対人スキルの低さからか、アイラは反射的に叫びながら掴ま
れた腕を乱暴に振り払った。そして、ボルドーはノーバウンドで1
0メートル以上吹き飛び、果物屋の屋台に突っ込んだ。

「　え」

賑やかだった表通りが今までとは違った意味合いで騒がしくなる。
屋台に突っ込んだボルドーはびくんとも動かない。

「つー」

気付けば、アイラは走り出していた。そして走り出してから気付く
自分の身体能力が異常なまでに強化されている事に。

「どうしようどうしよう……もう駄目だ。何処にも居ら
れない……」

うわ言の様に咳きながらアイラはとてつもない速度で走る。壁があれば飛び越え、人混みを通る時は驚異的な身体能力を活かしてすり抜けた。

そうして、アイラは気が付けば町から随分と離れた所まで来ていた。振り返ると、町はもう米粒大の大きさにしか見えなくなっている。それだけ走ったのにも関わらず、息切れ所か汗一つかいていない自分の身体能力に、アイラは力無く笑うだけだった。

「これでは、まるで化物だな」

化物、という自虐的なフレーズにまたアイラはまた力無く笑い、近くにあった木の下に腰を下ろした。どうやら森の入り口辺りまで来てしまっていたらしい。

「ん……？」

獣の気配がする、とアイラの中の何かが告げた。この感覚もポイントによつて付与された能力なのだろうが、今のアイラにはそんな事はどうでも良かつた。

「お前、私を殺したいのか？」

アイラは立ち上がり、森の入口に向けて声を掛ける。しかし返答は無かつた。そしてその数秒後、全長2メートル程の大きさの、頭から角を生やした熊の様な獣が四つん這いで現れた。

「ホーンベア、か？」

ホーンベアが唸り声を上げながら飛び掛かってきたが、アイラはそ

れを感情の籠つていらない眼で見つめるだけだった。

そして、アイラの華奢な肩にホーンベアが噛み付いた。

「何だ、お前　」

アイラの底冷えするよつた囁きを聞いて、ホーンベアの瞳が言い様の無い恐怖で染まる。

「私を殺す事も出来ないのか」

次の瞬間、ホーンベアの胴体に大きな風穴が空いた。

力無く崩れ落ちたホーンベア。そして、先程までホーンベアが噛み付いていた筈のアイラの肩には一切傷が付いていなかつた。

「……は」

返り血にまみれた身体を見下ろしながらアイラは思つ。これなら、大人しく前世で生き延びていた方がましだつたのでは、と。

そんな事を考えながら立ち尽くしていたアイラだが、再び森の方から何かが近付いて来る気配を察知し、一瞬身構え掛けたが、止めた。ホーンベアの様な魔物ですら傷一つ付けられなかつたのだ。さしたる脅威にはなりえないだろ？。

「ぬああああつーやつと追ついたぜえ！晩飯いいいい！」

「は？」

アイラの眼が点になつた。何故なら、森から出てきたのは半裸かつ汗だくで、やたらと暑苦しい顔付きの男だつたからだ。折角のシリアスムードも台無しである。

「むつー！お前か！俺の晩飯を横取りしたのはつー？」

「いや、だから」

「問答無用！男なら拳で答えて見せろつー。」

「私、男じやな」

「何故なら、その方がカッコいいからだつー。」

駄目だこの男。まるで話を聞いちやいない。

取り敢えず死なない程度に吹つ飛ばしてしまおう、とアイラは決心したのだった。

2 「成長の鍵」

「ぬおおおおおりやああああああああ！」

半裸男が暑苦しい声を上げながら突っ込んでくる。直線的な動きではあつたが、半裸男の動きは出鱈目なまでに速く、アイラは反応する事も出来ず、半裸男の飛び蹴りを顔面で受け止め、盛大に吹き飛んだ。

「ぬ……？」

蹴りを当てた筈の半裸男だったが、アイラへと蹴りを放つた方の脚に視線を向けると不思議そうに首を傾げた。

「……人の話を聞け。この変態め」

吹き飛んで地面を転がりはしたものの、アイラは何事も無かつたかの様に起き上ると首を傾げたままの半裸男に向けて石を投げ付けた。

アイラの常軌を逸した腕力で放たれた石は凄まじい速度だったが、半裸男はそれを身を屈めてかわし、そのまま前傾姿勢で暑苦しい叫び声をあげながら突っ込んできた。

「何度も喰らうと思つくなよ」

先程は反応も出来なかつた筈の半裸男の動きが、今のアイラにはきつちりと見えていた。半裸男が放つた右の拳を正面から右手で掴んで受け止めるが、アイラは上空へと力任せに放り投げた。

「ひ、おおおおおおおおーー。」

上空で喚く半裸男に向けてアイラは再び石を投げ付けた。流石に上空では避ける事は叶わないだろうとアイラは考えていたが、半裸男の動きは予想の斜め上をいった。

「そんなカッコ悪い攻撃が効くかああああ！」

意味不明な叫び声を上げながら半裸男は空中で体勢を整え、飛んできた石を蹴り返してきた。無茶苦茶な反撃にアイラは僅かに眼を見開きながらもそれを回避したが、その後に放たれた半裸男の落下のエネルギーを乗せた蹴りをとともに受けた地面に叩き付けられた。

「つぐーー！」

痛みは無かつたが、衝撃にアイラの脳が揺れた。意識が混濁して起き上がる事が出来ないアイラを見下ろし、半裸男は腕を組み豪快に笑った。

「ふはははははー最後に勝つのはカッコいい奴だ！」

お前は別にカッコよくないから、と突っ込みたかったアイラだったが、それも叶わざ意識を手放した。

何だか美味しそうな匂いがして、アイラは眼を覚ました。

「おお、起きたか！」

「う、む…？」

アイラが少しだけ痛む頭を擦りながら上半身を起しすと、半裸男は「カツ！」という擬音がつきそうな笑みを浮かべながら木の枝に突き刺さった肉の塊を差し出してきた。

「食え！ 取り敢えず食え！ 話はそれからだ！」

色々と言いたい事があったアイラではあつたが、実際腹が減つていて黙つて肉の塊を受け取り、かぶり付いた。うん、美味しい。

「ホーンベアの肉はジューシーで美味しいな、うん！」

「わざとか？ わざと言つているのか？」

何の肉か分かつてしまつたアイラはそれ以上食べる事が出来なかつた。

そして、アイラの食べかけも含め、ホーンベアの肉を全て平らげた半裸男は満足気に腹を擦りながら口を開いた。

「それで、お前。何でそんな状態でこんな所まで来てたんだ？」

そんな状態、と言われ、アイラは改めて自分の状態を確認した。綿の様な生地で出来た黒いズボンに白いシャツ、それから腰には財布代わりの皮袋を下げている。ちなみに武器や防具の類いは一切身に付けていない。確かに、こんな装備で町から遠く離れた森まで来ていたら怪しまれても仕方無いだろう。

「それは…」

「それに、だ。ホーンベアを徒手空拳で仕留めるとは、人間業じゃないぞ」

「俺はもつと強いけどな！」と無駄なアピールをする半裸男に対し、アイラはどう説明すれば良いのか考える。転生の事。出鱈目なまでに強化された身体の事。そして、自分がその力を御しきれず、人を傷付けてしまった事。何処まで説明するべきか。

「別に俺に話す必要は無い。だが、話す事でどうにかなる事だつてあるんだぜ？」

考へていることが顔に出でていたのだろうか、半裸男は妙に清々しい表情で言った。それを見て、アイラは自分の事情について話す事を決めた。

「実は…だな。とある事情があつて、私は後天的な要因によつて身体能力を始めとした様々な能力が飛躍的に上昇してしまつたのだ」

「何い！？」

アイラの説明を聞いて、半裸男が勢い良く立ち上がつた。やはり突拍子の無い話過ぎたか、と半ば諦めにも似た感情を抱き掛けっていたアイラだったが、次いで放たれた言葉によつてそれはあつさりと払拭された。

「何だその最高にカッコいい設定は！？ 羨ましそうだねー！」

ああ、馬鹿なんだ。アイラは確信した。

「それで、だな。あまりにも力が強過ぎて私は居場所を失つて…いや、壊してしまったのだ」

半裸男はゆつくりと座り、黙つてアイラの話を聞き続けた。

「私自身にも力の底が分からんんだ。こんな状態では、私は普通に生きていく事すら出来ない…私はどうすれば良いのだろうか」

「修行だ！」

即答だった。

「まあ、一理あるだろ？」「…」

腕を組み、今一つ納得が行かないといった様子のアイラに、半裸男は唾を飛ばしながら説明を始めた。

「いいか謎の美少女よつ！」

「誰だ、謎の美少女とは」

「お前の様なタイプの人間は滅多に居ないが、それでも修行が有効だと言える理由を教えてやろ？！」

どうやらアイラの突つ込みは無視の方向らしい。

「修行とは単純に個人の能力を高めるだけではなくつ！ 肉体的にも… 精神的にも！ 己を見詰め直し！ そして総合的な意味合いでもつて自分自身を理解する事も指すの、だあああああああああ

「！」

最後に勢い良く立ち上がり、無駄に洗練された無駄の無い無駄なボージングを決めた半裸男に、アイラは暫く考えた後、呟いた。

「確かに」

「どうやらアイラも比較的馬鹿な部類の様だ。」

「とは言え、私は下手をすれば犯罪者として手配されているかもしない。そんな悠長な事をしていらっしゃるかどうか…」

ボルドーは無事だらうか。まさか死んではいないうちが、あれで恐らく大怪我は免れないだらう。アイラがそんな事を考えていると、半裸男にてコピンをされた。

「痛つ！？」

ちなみにアイラには一切ダメージは無く、テコピンをした方の半裸男が指を押さえて地面を転がる羽目になっていた。

「…お前は何がしたいんだ？」

「今はネガティブな考えは捨てろって事だ！ 修行のあてはあるから、お前は自分が成長する事だけ考えてる！」

そう言つと、半裸男は両手を地面にあてがい、今までとは異なる調子で言葉を紡いだ。

「 開け。そして繫げ」

直後、眩い光を放つ直径3メートル程の円陣 恐らく魔法陣だろう
が地面に刻まれた。

「これ、は…？」

「所謂、転移魔法の一環だな。特定の場所にしか繋がらない代わりに発動に掛かるコストや時間が少なくて済むからな！」

事も無げに説明する半裸男に、アイラは眼を丸くした。

「お前、魔法使えたのか？」

「はっはっは！ いくらなんでも魔族にその質問は無いだろう？」

「えつ」

「えつ」

両者の間に沈黙が流れる。

「さて… 早速修行の舞台へ行くか！」

数秒前のやり取りを無かった事にしたいらしい半裸男に、アイラは空気を読んだのか無言で頷いた。

「ちなみに、何処で修行をするんだ？」

何と無くといった風にアイラが問い合わせると、半裸男は即答した。

「魔界だ！」

……。

「えつ」

次の瞬間、一人は魔界へと転移した。

2 「成長の鍵」（後書き）

御意見御感想、お待ちしております！

3 「修行の成果」（前書き）

その内世界観やキャラ紹介の項を設けますね。

3 「修行の成果」

アイラが修行と称して行方不明になつてから5年が経ち、ティムレイトは23歳、アリシアは18歳になつた。

「はい、討伐目標の証明部位の確認が取れました！ 依頼達成ですね、お疲れさまです！」

愛らしい顔立ちの受付から報酬金を受け取つたティムレイトは、ギルドの飲食スペースで一足先に食事を始めていたアリシアが居るテーブル席の対面に腰掛けた。

「報酬は全部ギルドの金庫に入れといたぞ」

「うん。 まだまだ手持ちもあるからそれで大丈夫だよ」

そしてティムレイトも適当に料理を頼み、しばらく食事に没頭した。

「ねえお兄ちゃん」

食事も終わりに差し掛かった頃、アリシアが口を開いた

「ん？」

「最近ね、こんな噂があるんだけど知ってる？」

「ここ最近、隣の国でギルドから要注意指定されている魔物を片つ端から徒手空拳で殺して回っている冒険者がいるらしい。そしてその冒険者は年端も行かない黒髪黒目の中少女らしい。」

「それだけじゃ何とも言えないな　でも、気になる情報でもある」

「でしょ?」

ハーリア兄妹がアイラと別れた日、アイラに吹っ飛ばされたボルドーから聞いた話ではアイラは普段からは想像も出来ない程の怪力を発揮していたらしい。当時のアイラの戦闘スタイルは力押しというよりは身軽さをいかした技巧派であり、ボルドーの様な巨漢を腕力だけで投げ飛ばすことは不可能だろう。と言つたかそんな事はティムレイトにも不可能だ。

「やつぱり…5年前のあの日、アイラの身上に何か起きたんだろうな」

「それが何かは分からぬけど、その事があつてアイラちゃんは姿を消した」

「んじゃ、いつちょ行つてみるか？ キルドラン王国まで」

「うん…」

そんなどある兄弟が探している張本人であるアイラは、キルドラン王国領内のある森の中で魔物と対峙していた。

一対の翼を持つ全長約10メートルの巨大な身体、微かに光沢を放つ紅い鱗、鋭い牙が覗く口からは時折炎が噴き出している ドラゴンである。

森、とは言つても既に周囲の木々はドラゴンが放つた火炎の息によつて焼き払われており、巨大な魔物と人間が対峙するには余りにも不利な状況だと言える。しかし、アイラは傷一つ負つてはおらず、相対するドラゴンは息も絶え絶えといった風である。

「さて、そろそろ終わらせるか

そんなアイラの言葉の意味を理解したのか、ドラゴンが咆哮をあげながら突っ込んできた。大型のトラックですら容易くスクラップにしてしまいかねない威力を秘めた突進に対して、アイラが取つた行動は至つてシンプルだった。

「……っ、せー！」

微妙に気の抜けた掛け声と共にアイラが飛び上がり、凄まじい速度で突っ込んできたドラゴンの鼻っ面にドロップキックを叩き込むと、まともに蹴りを受けたドラゴンは仰け反つた体勢で5メートル程後ろに吹き飛んだ。

「止め、つと」

間髪入れずドラゴンとの距離を詰めたアイラはその無防備な腹に向けて右の拳を振り下ろした。ドラゴンは吐血しながらしばらく痙攣していたが、やがて動かなくなつた。

「ええ、と…これは、レッヂドラゴンか

アイラがドラゴンの死体に眼を向けて意識を集中させると、頭の中にドラゴンの情報が浮かんだ。これも転生の際に得た能力の一つである。

「この力試しもそろそろ止めておくか。ギルドに眼を付けられてしまっているしな」

アイラの修行期間は実は1年だったのだが、魔界と此方では時間の流れ方が違うらしく、気が付けば此方では5年も経過していた。当然、5年も所在不明で一切ギルドに顔を出さなかつたアイラのギルドのライセンスは失効しており、再びギルドランクFからのやり直しどとなつてしまつたのだ。ギルドランクはFからSSSまであり、依頼の実績や特定の試験の可否などによつて上下する。ちなみに以前のアイラのランクはDだつた。

魔界での修行で転生によつて付与された能力の全てを把握したアイラは腕試しと称してギルドにあつた高難度の依頼を受注しようとしたのだが、自分のランクと依頼のランクが違い過ぎて許可が下りなかつた。なのでアイラは依頼の情報を頼りに、依頼とは関係無く個人的に魔物狩りを始めたのだつた。

ギルドで依頼を受けずに魔物を討伐しても報酬が得られないだけで別に違法ではないのだが、意図的にギルドが仲介している依頼の討伐目標を立て続けに狩り続けているアイラに対し不満を持つた一部の高ランクの冒険者達がギルドに対して訴え掛けた為、ギルドから度々注意を受けているのだ。

「つ、だあああああああ！　またお前かよ！」

ドラゴンの死体に乗り、あれこれと考え込んでいたアイラの耳に心底悔しそうな叫び声が届いた。アイラがちらりと視線を向けると、ドラゴンの死体の足元辺りで地団駄を踏んでいる30代半ば程の男が居た。彼こそがギルドに対して不満を訴え掛けている冒険者の一

人、名前は確か

「 そう、アカハナだつたか」

「違えよ！ アカシアだつつのー！」

ちよつとした眩きに対しても律儀に突っ込みを入れてくるアカシアを見て、アイラは満足気に頷いた。実はこのやり取りも4回目なのだが、それでも飽きずに反応をしてくれる突っ込みの鏡の様な男である、このアカシアといふ男は。

「アカシアさん、もう帰つても良いですか？」

「つてか、もう帰りますんで。お疲れつしたー」

「つて、おおおーーー！ お前らもうひょい空氣読めよーー！」

パーティーを組んでいるらしい、双子の女性が町へと向けて歩き始めたのを見て、アカシアが慌てて追い掛けで通せんぼをした。

「えー？ だつてもう其処の人があつちやつてるじゃないつか」

「つてか、このやり取り何回目なんすか？ こんな事ばっかりしてたらマジで金の無駄なんで止めて貰えます？」

「ええー…俺か？ 俺が悪い流れなのかこれ…？」

何だかアカシアが可哀想になつてきたので、アイラはドリゴンの身体から飛び降りて声を掛けた。

「ああ、毎度毎度悪いな。こつちは力試しがしたかっただけだから、『イツの討伐証明部位ならそつちで持つて帰つて貰つて構わないぞ』

「「「あ、マジすか?」」」

三人の声がハモつた。何だかんだで仲が良いらしい。

「まあ、今度からはちゃんとギルドで依頼を受けしていくつもりだから今回のような事はもう無いぞ。安心してくれ」

アイラの言葉を聞いて、アカシアは不思議そうな表情を浮かべた。

「なあ、何で今までギルドで依頼を受けなかつたんだ? お前程の実力ならすぐにランクを上げられるだろ?」

アカシアの問い掛けに、アイラは不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「どうせランクを上げるなら派手にやろうと思つてな… 今度王都で開かれる闘技大会に出ようと思つている」

「ほお

アイラの言葉を聞いて、アカシアの瞳に今までとは違つ色が宿つた。

「面白えじやねえか。俺も参加するつもりだ… ま、そんときやあ覚悟しりよな?」

このアカシアという男、突つ込みばかりが目立つが実はギルドランクはAと何気に実力者である。

「ああ、楽しみにしてる　で、この状況、どうする？」

アイラが周囲に眼を向けながら問い掛けた。アカシアも釣られて周囲に眼を向け、眼を見開いた。

「ま、マジかこれ…」

ドラゴンが死んだ事を察したのだろうか、縄張りをドラゴンに奪われていた大量の魔物達がアイラ達を取り囲んでいた。

「「アカシアさん、頑張つて下さいね！」」

「お前らも戦えよー?」

「おい、漫才は良いからさつさと蹴散らすぞ」

そう良いながらアイラは魔物の群の一 角に突っ込んで行つた。

「つたぐ、お前が居ると口クな事が起こりやしねえなあ本当によー。」

満更でも無さそうな笑みを浮かべ、アカシアは双子を従えてアイラとは反対方向の群へと突っ込んで行つた。

そして数時間後、4人揃つて返り血まみれで町に戻つて周りから轟鑿を買う事になるのだが、それはまた別のお話である。

3 「修行の成果」（後書き）

散々喋らせておいてアレですが、アカシアさんは再登場無しです。
ゴメンねアカシアさん！

4 「試練の道」

キルドラント王国の首都、マリーリア。

其処で毎年開かれている闘技大会には国内外を問わず多くの冒険者、武芸者などが参加している。そんな闘技大会にアイラが参加しようとしている理由は莫大な優勝賞金でもより強い強者と戦いたいからでもなく、大会成績に応じてギルドのランクが上がるからである。実際にどれ位ランクが上がるかは毎年若干変わるのがだが、闘技大会の優勝者ともなれば確実にランクSSSには届くと言われている。

その闘技大会の日までの時間を要注意指定された凶悪な魔物と戦う事で潰していたアイラだったが、そろそろマリーリアを目指す事にした。

「さて、準備はこんなものか」

最低限に纏めた荷物を背負い、アイラは魔物狩りの間に拠点としていた町を出た。移動手段は徒步。ちなみにアイラが居る町からマリーリアまでは馬車で10日程掛かる。そして、闘技大会の参加受付の期日は3日後である。

アカシアには馬車で一緒にに行こうと誘われたのだが、アイラは断つた。何故なら、馬車よりも自分で走った方が遙かに速いからである。

簡単な柔軟を済ませてから、アイラは駆け出す。そして、走り出して数秒でアイラは時速60キロ程まで加速した。しかし、これでもアイラはかなり余力を残している。アイラは修行の過程で、自身の

異常なまでに強化された身体能力をかなり細かな精度で制御する術を身に付けた。ちなみに現在アイラは全力の5パーセント程の力で走っている。

アイラは更に力を10パーセントまで解放する。現時点ではアイラの速度は時速にして160キロを越えていた。

「ふむ、これなら明日の夕方には着くか」

たまにすれ違う馬車や徒步で街道を進んでいる冒険者が仰天して引つくり返っている事にも気付かず、アイラは呑気な調子で呟いた。

それから数時間、休む事無く走り続けていたアイラだったが、不意にその歩み 歩みと言えるレベルの速度ではなかつたが を止めた。

立ち止まつたアイラは眼を凝らして進行方向を見た。どうやら馬車が盗賊か何かに囮まれて立ち往生しているらしい。別に素通りしても良かつたのだが、とある男の「困つてる奴を見捨てるなんて、力ツコ悪いにも程があるぜええ！」という台詞が脳内再生されたので、疲れた風に溜め息を一つ吐いてから馬車の方へと近付いていった。

「あー、もしもし？」

馬車を取り囮んでいた盗賊らしき男達へとアイラが投げ槍に声を掛けると、その内の一人が抜き身の剣を片手に近付いてきた。

「ああ、何か用か？」

「うむ。ひょっとしたらお前達が其処の馬車を襲っているんじゃないかと思つてな。もしそうならお前らを全員始末するつもりなんだが…」

アイラの言葉を聞いて一瞬呆けた様な顔をした盗賊だが、次の瞬間には大爆笑していた。

「だつはつはつはつは！　そりや、俺達あ盗賊だけど？　だつたら何だあ？　お前みてえな餓鬼が何を！」

アイラの一番近くで笑っていた盗賊が地面に叩き付けられた。理由は勿論、アイラに拳骨を喰らつたからである。

「悪く思つなよ…」の国では盗賊行為は例外無く死罪なんだからな

言葉を失い、呆然とした様子でアイラと地面に倒れ伏した男を見ていた盗賊達だが、その一人が短く悲鳴を上げた。

「ひ……し、し死んでる…！」

完全に恐慌状態に陥つてしまつた男の言葉を聞いて、盗賊達は地面に倒れ伏してしる男へと視線を向け、大きく眼を見開いた。先程拳骨を喰らつて地面に叩き付けられた男の登頂部は完全に陥没しており、其処からは止めどなく血が流れていたのだ。

「な…化け物か、こいつ…」

「と、取り敢えず囮めえ！」

顔に言い様の無い恐怖を滲ませつつも、盗賊達は割と統率の取れた動きでアイラを包囲しようと動き始めたが、それより早く、アイラは盗賊達に指示を出している男 恐らく頭領だろう に肉薄し、素早く右手を振り抜いた。

「が ！？」

頭領らしき男の首が宙を舞う。その事に他の盗賊達が気付くよりも速く、アイラは先程と同様に手刀で首の無い死体を量産していった。

「ふむ、こんな所か」

馬車を囲っていた14人の盗賊を全て片付けたアイラは、まるで人の気配が感じられない馬車の方へと近付いていった。

「おい、気配を殺したって無駄だぞ」

「あ、やっぱりバレてた？」

アイラが呆れた風に声を掛けると、馬車の下から男が這い出てきた。

「いやー、いきなり盗賊達に絡まれちゃってどーしようかと思ったんだけどさ？ 助かったよー！ 君に盗賊達の注意が向いてる間に逃げようと思つたんだけど逃げそびれちゃうしことにじつなる事が思つたよもー」

「あ、そひ」

見るからに軽薄そうな男がべらべらと喋るので聞いて、アイラは無

感情な声で適当に相槌を打つた。『いやや、相性が悪いらしく。

じゃあ、と言つてその場を後にしようとしたアイラだが、軽薄男に腕を掴まれた。

「何だ？」

「いやや？ 助けてくれたついでにもう二つだけ助けて欲しい事があるんだけど」「

「断る」

「まーまーまーまー！」

何なのこいつ。ウザいんですけど。

取り合つ必要は無いと判断し、アイラはそのまま歩き始めた。しかし、アイラの腕を掴んでいた軽薄男は引き摺られながらもその手を離さない。

「実はね、マリーリアの闘技大会に向かってる最中だったんだけどさー、盗賊のせいでの馬に逃げられちゃって足がないのよー」

「見ての通り、私は徒步だ。代わりの馬車など用意出来ないぞ」

歩みを止め、地面に転がつたまま笑つてゐる軽薄男に対して説明をしたアイラだったが、軽薄男はほんの少しだけ笑みを深め、いつ答えた。

「だって君、闘技大会でるんでしょー？ それなのにこんな時期に

此処に居るつて事はヤー…何があるんでしょう？ 移動手段

「 何故、私が大会に出ると思つ？」

「 戦士の勘、かなー？」

アイラの問い掛けにへらへらと笑いながら答える軽薄男だったが、先程とは違い、瞳の奥に微かな光を宿していた。この男は間違いなく実力者だと、アイラの勘が告げた。

「 ……報酬は？」

「 金貨3枚でどうかなー？」

「 分かつた。運んでやる」

観念した風にアイラが頷くと、軽薄男は素早く立ち上がり、アイラの両手をがつしりと握った。

「 ありがとー！ あ、そつそつー 僕の名前はオーキーー、マイド＝オーキーーっていうのー よろしくねー」

いや、偽名だろそれ、と突っ込みたかったアイラだが、また面倒な返しが来るのだろうと想つたので何も突っ込まず、「私はアイラだ」とだけ言つた。

「 そんじゃー、アイラちゃん、よろしくねー。で、どーやつてマリーリアまで行くの？ 転移魔法？ それとも幻獣召喚とか

「

「 徒歩だが？」

「……またまたー」

アイラの返答を聞いて、冗談っぽく手をひらひらと振つてみせたオーキーだが、アイラの顔が嘘を吐いていない顔だと気付いたのか、やや表情を固くしながら再び問い合わせてきた。

「マジ、で?」

「マジだが?」

笑顔のまま硬直しているオーキーを無理矢理肩に担ぐと、アイラはそのまま走り出した。時速にして200キロ程の速度で。

「ちよちよちよちよちよ！？」

「黙れ、舌を噛むわ！」

困惑しきつた表情で声にならない声をあげるオーキーの一言告げ、アイラは更に速度を上げる。

「ちよあふ」

どうやらオーキーは気絶したらしい。アイラは好都合だと考え、肩にオーキーを抱えたまま走り続けた。首都マリーリアまではおよそ800キロ程なので、予想通り明日の昼には到着するだろ？

結局、オーキーは夜前の準備の為に止まるまで一回も眼を覚ます事は無かった。

4 「試練の道」（後書き）

御意見ご感想、御待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3922s/>

セカンドライフは異世界で【改訂版】

2011年5月13日13時39分発行